

T 雄の成長 (三)



浜 田 駒 子

前回は、学校生活について書いた。

控えめに書いたつもりであるが、自慢しているように受けとられはしないかと不安になった。

倉橋惣三先生の『子供讃歌』の『我が子』という章に、

それは人前に余り声高にうたうべきものではないかもしれない。また、なんのののかとかれこれ説明づけるべきものでもあるまい。ただ独りでハミングしているのがいいものであろう」とあるので恥かしくなるのである。

学校での行事を細かく書きたかったが、声高にうたうようになっては困るので控えた。

校長先生、教頭先生、担任の先生、放送部の先生、音楽の先生、その他の先生に、浜田君、浜田君といわれて過ごしてきた。

ありがたくもあるし、本人は重荷になることもあったかも知れない。

い。

昭和四十三年度の健康優良児の学校代表として出て行き、相模原市内十九校の代表として県の選考会に出るまでの一か月などは、苦しくがい日々であった。栄光のかげのつらさ、努力を書いたらと思ったが、母が書いていや味になったりしては本意でないので、すべて割愛することにする。

友 だ ち

T 雄の一年生の時からの友だちをみてみると威勢のいい子どもとは、友だちにならないようである。どのクラスにも横車を押したり、ケンカ好きな元気のいいの一人いた。そういう友だちは苦手である。が、クラスの友だちはよく遊びにくる。

T 雄は自分が遊びに出かけるよりも、友だちを家に連れてきて

遊ぶのが好きで、学校の帰りによく友だちをつれて帰ってくる。

外遊びはカンケリ（カンをけてかくれんぼ）、木のぼり、タイヤとび（幅とび）が主である。日曜には、四、五人集め、家の前に集合させ自転車で、相模湖、津久井湖、多摩動物園、子どもの国、などへ行く。

家の中で遊ぶ時は、マンガ本読み、ランプ、将棋が主である。

このあたりでは、ほとんどの母親はパートタイマーに出ている。お昼ごはんも、お三時もお金でもらって、自分たちで好きに買ってたべている。

T雄の家に来ると、母が必ずいて、お菓子を出すので堅くするらしい。

おとなでも、家にお酒をのみきた近所の方が、のみながら、

「お宅の、この応接間に坐っていると、職員室にいるような気がする」とおっしゃって父も母も大笑いしたが、何となく堅くするらしいふんい気なのだろう。

たった一度、T雄が友だちを三人連れてきて、レコードをききはじめた。ベートルベンの交響曲だから片面、十五分かかる。

しばらくすると皆もじもじはじめ、となりをつついてみたり、窓の外をみたりしはじめた。Tは自分が陶醉してきているのにうるさくなつたので、「皆、マンガ持ってきてもいいよ」というと、三人ダツとかけ出して、子ども部屋に行き、マンガを持っ

てきて読み出した。

やがて、マンガを読んでもしまったら、「僕たちかえるよ」と二人帰ってしまった。

一人残った男の子が、レコードは終らないし、帰るともいえないので、部屋の入口に立ちつくしている。

T雄が、「帰ってもいいよ」というと、

「じゃあ、おじゃましました」と母に声をかけた。

母が出て行って、「また、いらっしゃいね」

「さようなら」

「さようなら」

「ハイ」

この母の「さようなら」に「ハイ」と答えたのがおかしくて、

「T雄、かわいそうに。〇〇君、よっぽど緊張してたのね」と笑った。

思い出してみると、友だちと悪いことをしたのは次の三つである。

その一

母が、近くの友だちの家に行ったら、T雄と友だちが、ふかしたてのおいもをたべている。その家は母親が勤めに出ているから、母親がふかしてくれるわけがない。

「自分でふかしたの？」と友だちにきくと、フッフフと笑ってばかり。

「おいもは買ったの？ それとも、台所にあるのをだまっていたの？」

I 雄が仕方なく話した。

「アノネ、芝生で〇〇君と角力とっていたんだよ。(このあたりは芝生が売るために育ててある。芝生の畑である) 組んでころころころがって芝生の端まで行ったらね、となりがいも畑だったの。それでちょっと掘ってみたらいもがあったので持って来て二人で茹でてたべてるんだよ。でも中はまだ固いの」

母は、

「いも掘りをしたかったらお母さんといえばその持主に話して畑の『さく』を一つ買って掘らせてあげるのに」

「ハ―イ」

「だまってとって来たたらどろぼうなのよ」

「ハ―イ」

神妙になってきた。

その二

お稲荷さんの初午のことである。

夜店がでる。

朝から子どもたちは落ちつかない。境内に見に行ったり、家に

帰ったりしている。

夜、I 雄の妹が指に、三つ四つ指輪をして帰って来た。

「とみ子ちゃん、そんなに指輪買ったの」

「ううん、これは、お兄ちゃんに。これは〇〇さんがくださったの、これは〇〇さんが二つもくださったの」

母は、男の子がそんなに指輪を買うだろうか。『あてもの』をしたら指輪なので、みんなが妹にくださったのだらうと思っていた。

あとで帰って来たI 雄にきくと、

「アセチレンの光だから、端の方はとっても暗いんだよ。『おじさんハイお金』っていってお金をあげて二つもらうの」

「まあ、悪いわね」

「みんなやってるんだよ」

「皆やってるからって、あなたがやっていいわけはないでしょ」

「ウン」

「今度、みつからなかったから、困ったわね。失敗しておじさんにおこられれば、こりてやらないだろうけど、これに味をしめてまた、やったりたいへんよ。今に大どろぼうになっちゃうわよ」

その三

駅前にスーパーマーケットが開店した。

開店の日、夕食の時に、「おかあさん」とみせる。ゴムケシで

ある。二十円くらいのものか。

「それ、どうしたの」

「○○がとったので、僕も同じのを持って来たの」

「万引じゃないの」

「ウン」

「ほら、この間、お稲荷さんの初午の時、話したでしょ。万引に成功すると、必ずまたやってみたくなるらしい」

よくよく話したら、もう決してしないからかんにんしてくれ」といふ。

母はここまで書いて、またしても後悔の念にさらされる。

また、倉橋先生の子供讃歌の『我が子』の章から引用させていただくと、

「我が子の柔い唇を砂糖湯の一滴を以って喜ばすことはなし得ても、食塩や、キニーネの溶液を以って、初生児の味覚のテストを試みるような研究態度は思いもかけないことであつた」

母は、何でわが子のあやまちをここにさらさねばならないのか、と思うのである。

いいことづくめではテレクさいので、やっと三つ目でくり出したといったところである。

自己嫌悪になやまされると同時に、もし、この文を警察の人が読んで、家にやって来たら困るな、と思う。

愚かな母と思う。賢母ではないと思う。

ケシゴムの後、しばらくたつて、父の機嫌のいい日に、暖かい道を駅まで送って行きながら、「怒らないでね。T雄がね、ケシゴムをね」と話した。

「そういう時は、翌日、その消しゴムを持たせて、店にあやまりに行かせなくてはいけないんだ」と叱られた。

母の愚かな愛が大泥棒や、万引常習犯にしたててしまうのだと痛感した。

その後、もう二年ほどたつ。

「万引しないの」

「もうしないよ。いやだなあ」と苦笑いしている。

趣味

a、読書

第一は読書である。

父が活字に関係の深い仕事をしているので活字にあきていそうなものなのに、活字中毒患者のように、片時も読むことをやめない。お手洗いはもとより、風呂の中でも何か読んでいる。

T雄がそれを受けついでだが、ほんのちょっとした間でも本を読ん

でいる。ふとんをたたみかけて読んでいる。別の部屋に何かを置
きにいった、もう読んでいる。お食事の前でもごはんをよそいま
で読んでいて、お食事が終って皆で話をしてちょっととぎれると
もう読んで叱られる。

毎日学校から帰って来る時、友だちを連れてない時は、本を読
みながら歩いている。

母がお使い途中で会って、

「今は二宮金次郎の生きていた時代とちがうのよ」と声をかける。

「ハーイ」と、やめるが、しばらくしてふり返るともう読みなが
ら歩いている。メッタに自動車を通らないから心配である。
の、いつ自動車が来るかわからないから心配である。

友だちと一しょの時は玄関にカバンを置いて

「タダイマ、遊んで来る」とかけ出す。

読みながら帰った時は、そのままの姿勢でカバンをかかえたま
まソファに坐って本を読みふける。

「手を洗っておやつたべなさい」

ホッと顔をあげて「タダイマ」という。

お年玉やこづかいをためて、よく本を買う子だが、何しろ本が
高いので、なかなかかえない。友だちに借りたり、図書館で借り

たりしている。

三年生の頃から、厚い本で、字も小さいのを何日もかかって読
むのが好きになった。

片時も本を手から離さないで、どうしても読む本に不足し、
一冊の本をくり返しくり返し読むことになる。一番多くよんだの
は、小公子で、もうボロボロになり、また買いなおそうかなとい
っている。

妹のとみ子は、本を読むのが苦手である。

「雄は三年の春にチャベックの「長い長いお医者さんの話」を
読んだ。妹は、字が小さくておもしろくないという。

「好きな本を買っていらっしやい」と、本屋に行かせると、三年
生らしい本を買って一日で読んでしまい、真新しいのをまた、き
れいに買ってきた本屋の包装紙につつんで本棚にしまっておく。

三年生までに読ませたい本のリストをみると、不思議に全部読
んでしまっている。

「雄の何度も何度もとり出してきては読んでいるのを見ている
ので、まことにあっけなく、その子その子で違うものだなあと思
う。

五年の夏休みに、ドストエフスキーの「罪と罰」のジュニア版
を買って来て読んでいた。

「これを本ものと思っははいけない。原作はもつと厚い本だから大きくなったら読みなさい」といっておいた。

そのころ、父の本棚からガリバー旅行記を探し出した。

小さい頃から絵本でガリバー旅行記はみていたが、こんなにくわしいのははじめてと喜んだ。

「なわをゆるめてもらっておしっこをしたり、朝早くウンチをする、小人が小さい車まで何度も何度も運んだっていうのを読んで、これは本当だと思っただよ」といっていた。

それから「完訳」というのを覚え、「完訳がいい、完訳ないかな」というようになった。

春休みに、漱石の『吾輩は猫である』を読みたいといっしたので、

「お父さんの本棚にあるわよ」といったら、

「それ完訳？」ときくので笑ってしまった。

「原作に忠実に歴史的かなづかいで書いてあるわよ」

「あれ、僕弱いんだよ」

「中学生になって古文も出るようになっていくらか馴れておいた方がいいから、無理しても読んでみたら」と、いったら辞書を片手に読み出した。

はじめは、声をたてて笑っていたりした。

「やっぱり疲れる。僕本屋へ行って来る」と出かけた。

「全部読んだの？」ときくと、

「はじめは、おもしろかったけど（文中で）お客が来て話をはじめたら話していることがさっぱりわからないのでやめた」ということだった。

ということだった。

本を三冊買って来た。

一冊は次郎物語で、あと二冊は鉄腕アトムの新しい単行本である。

「お父さんの本棚にたしかあったと思うけど」

「うん、でもこれは第五部までのっているんだよ。四年の時一度友だちに借りて読んだけどやっぱり全部読みたかったから。

アトムのマンガは、今まで僕の持っているのではなくて新しいのだから買って来た」

入学式までの毎日、相変わらず友だちと外で遊んでいる。午前中遊んで疲れたといいながら、家に入ってき、汗が出たのをパンツまでとりかえて、食事の支度の間本を読み、食事がすむと一しきり本を読んで、また、夕方まで遊びに出かけている。

「このころ、遊ぶのがおもしろくて、これで中学生になれるかなあ」と一人ごとをいっている。

母は、外で遊ぶ時間と、家で本を読む時間のバランスがいいし、集中心力もいいし、心配ないと思っっている。